

[エッセイ]選者からのコメント

森の中の小さな泉のような

森 合音(四国こどもとおとなの医療センターアートディレクター／NPOアーツプロジェクト理事長)

この度、当学会の発行するジャーナルにエッセイ部門を創設することになり、第一回の選者をさせていただきますことになりました。

論文発表が主な目的であったジャーナルにおいてエッセイを掲載する意味はなんだろうと考えました。論文には専門分野に通底したテーマや表現のルールがあります。それは人間が客観性を担保に時代を超えてつないできた価値ある流れです。一方エッセイにはルールがありません。どこまでも作者の主観や感情にそうものであり、内容も文体も基本自由です。論文が滔々と流れる大河だとしたら、エッセイは森の中で人知れず満ちている泉のようなものではないでしょうか。

いつか大河に合流するかもしれないその小さな泉の意味と真摯に向き合いたいと思いました。そこで語られる内容が作者にとって「切実かどうか。境界をこえようとしているか」を選出の指標にすることにしました。そういう意味で今回の3作品はどれも基準を満たしていると考え全編掲載の運びとなりました。

思い返せば13年前、私が初めて学会発表をしたのがアートミーツケア学会でした。地方の病院の精神科病棟で実施したアートプロジェクトの事例報告という、たった数分の発表でした。でも、そのために私は何度も何度も練習を重ねました。学会当日、熱量だけ多い私の発表に通りすがりの播磨さん(アートミーツケア学会常任理事)が足をとめて、うんうんとうなづきながら聴いてくれたのです。そして「それでどう思った?」「その時どんな反応があった?」播磨さんからの質問に必死で答えているうちに、はじめはポツポツだった観客がどんどん増えていきました。自分にとって切実な思いを、関心を持って聴いてくれる人がいることの嬉しさをしみじみ味わいました。あの日のことを今も時々思い出します。

アートミーツケア学会が、若い研究者や実践者にとって、その道の先をいく先輩や、分野を超えた仲間の、うなづきや問いかけに出会える場であればいいと思います。

以下に、それぞれの作品に対するコメントを掲載します。

「表現をケアする表現。ケアを表現するケア」

～2023年1月21日石川県珠洲市ガクソーでのワークショップについての出来事から～

作者は、リフレクティングという精神治療の手法を参考にしつつ、「言葉」だけでなく「絵」や「詩作」による独自の対話型アートワークショップを考案している。さらにその実践過程において、他者の表現を大切にしつつ、そこに自己の表現を重ね、受け止めたり、受け止められていくうちに、生成される作品が、やがて「誰のものということが言えなくなっていく」という感覚を味わっている。「世界をわかちあおうとする体験は表現を表現でケアし合うような体験であった」という作者の言葉に象徴され

るように、互いの表現を尊重しつつ、受け入れ合い、作品(世界)を作るという過程そのものが、事象の枚挙ではすくいきれない曖昧さや、あわいの中に確かに存在する「大切な何か」を包摂しながらケアし合う「場」を形成したことが伝わる。また、自身も揺らぎながら、それでも切実な気づきを伝えようとする真摯な姿勢とことばが読者との境界線をあいまいにし、相互理解へ向かう希望を感じさせる。

境界をまたいでみたら:シングルマザーの癌患者と小学生のヤングケアラー

ある日突然にがん患者になった作者とヤングケアラーになった娘の2年間の闘病生活の体験を綴る。そこで語られる言葉は、シングルマザーががん患者になることの経済的、社会的、精神的な危うさ、現実的な問題を浮き彫りにする。その渦中で、作者は科学では証明できないもの(アートも含め)が支えになっていることに気づく。また、娘へのインタビューからは、思春期の娘が引き受けなければならない重すぎる役割、手を差し伸べてくれない社会に対する怒りと諦め、自分の無力さから来る罪悪感、母と一緒に歩くことの嫌悪感、などが赤裸々に語られる。やがて娘は過酷な日常の中で、「絵を描く時間」が自分にとって「全てを忘れて没頭できるケアの時間」であることに気づく。母と娘が対話や自己表現(アート)を介して痛みを共有し、そのことで絆を深め、支え合い病を乗り越えていく様子が装飾のない言葉から伝わる。この体験と気づきが母娘の間で熟成され、やがて社会へと広がり他者の痛みをケアしていく縁となることを期待する。

他者理解の為の自己と他者の心情に対する自己処理的思考

はじめに当学会の「エッセイ」募集に対して、文章表現の枠を超え、映像や図で「心のうち」を表現しようと試みた作者の勇気に敬意を表したい。その表現そのものがこれまでの既成概念を壊し、新しい可能性を問う挑戦であり、まさに「境界をまたぐ」ということに他ならないからだ。作者は自己の中に去来する感情を、一方向からではなく多方向からすくいあげようとする中で、その中心にある「大切なこと」を伝えようとしているように思える。まず、作者にとって「アート」とは「ケア」とは何か。という定義を作り、そのために必要な「他者理解」や「価値観の変化」の重要性を言語化し、理論的なアプローチで伝えることを進めつつ一方で感覚的なアプローチも試みている。しかしながら作者の「心のうち」に存在する明確な「何か」を他者に伝えるためには、もう少し丁寧な自己の対話と鑑賞者への歩み寄りが必要だと感じた。「音」や「映像」「言葉」の重なるバランスやタイミング、強弱など、表現手段が増えるということは、多層的な伝達の可能性を感じさせると同時に、それぞれが主張し合うことで時には打ち消し合い、伝えたいことが分散してしまうという危険性をも孕んでいる。今後、作者の表現に触れた鑑賞者からの表現によってさらに自己の表現を問い直す。というプロセスが必要になるだろう。それを繰り返してゆくことで、より自己理解が深まり、ブラッシュアップされ、他者理解へとつながってゆくことだろう。